四国農学連報

第24回
発行者
四国地区農業大学校
学生連盟
編集
高知県立農業大学校
学生自治会

農大での経験と将来の道

四国地区農業大学校学生連盟会長
高知県立農業大学校学生自治会長
長山竜也

私は、昨年二月に高知県立農業大学校の学生自治会長に就任しました。今まで会長という大役に就いたことがなく、上手くやっていける自信がありませんでした。それに加え、今年度は高知農大が四国農学連の当番県で、四県自治会の会長としての役割もあり、「自分で大丈夫なのか」、という不安でいっぱいでした。

しかし、副会長をはじめとした自治会役員や、先生方の協力もあり、無事にスポーツ大会や意見交換会を終えることができました。こうした諸行事を行う中で、一人で仕事を抱え込むのではなく、学校全体で支え合っていくことが大切であることに気づかされました。四国農学連の行事だけでなく、高知の「伝統文化」になりつつあるよさこい祭りへの参加、さらに農大祭も学生同士で協力し合い、成功裏に終えることができました。また、今年は皇太子同妃両殿下にご臨席していただいた全国農業担い手サミットが高知県で開催され、農大生もスタッフとして参加させていただき、与えられた役割を無事果たすことができました。私も発表者として緊張しながらも落ち着いた発表ができ、貴重な経験を積むことができました。

私は農大卒業後、就農して実家の農業を継ごうと考えています。しかし、今のままでは経験不足で、成功するまでの道はまだまだ遠く、農業に近道はないと思っています。

まずは、経営者としての力を身につけるために、二年間ほど、先進農家で研修をさせてもらおうと考えています。そこで、先進的な実際の経営、具体的な栽培方法、社会状況の変化への対応など、将来、自分が経営していく力にしたいです。また、研修を通して、たくさんの人と出会い、人脈を増やしていきたいです。就農後、最初にすることは土佐文旦の植え替えです。併せて、空いているハウスに文旦・小夏を植え、果樹生産に力を入れていきたいです。ただ単に栽培するだけでなく、糖度が高く、大玉で種無しの文旦の栽培方法を研究・確立し、加工等様々なことにもチャレンジし、他の農家に負けない経営をしたいです。一～二年でなく、五年あるいは十年の長期の経営計画を立て、着実に未来につながる道を歩んでいきたいです。

この高知県立農業大学校では知識や技術だけでなく、大切な仲間に出会うことができました。二年間学生生活を共に過ごした親友を今後も大切にし、卒業後にもいろいろな情報を共有しあっていきたいです。

最後に、自治会長という役割を務めて、リーダーとして上に立つ責任の重さや重要性をとても感じました。一つ一つを前向きに取り組むことで、不安でいっぱいだった一年前と比べ、人間として大きく成長できたと思います。この経験を活かし、将来は地域の見本となり、地域を盛り上げて、引っ張っていけるような農家を目指したいです。

四県スポーツ大会開会式にて

考え抜く力を

高知県立農業大学校
校長　縄　砂恵子

学生の皆さんは、農業大学校で様々なことを学び、経験を積んで充実した日々を送られてきたことと思います。特に実践教育の柱であるプロジェクト学習では、一人一人が課題を設定し、苦労を重ねながらも、自ら立てた課題について検証を行い、結果を導き出すという経験を通して、ものを育てることの難しさや喜び、観察力の重要性を実感したことでしょう。これらは農業大学校でなければできない貴重な体験です。

さて、時代はまさに転換期にあり、デフレからの脱却と経済再生を旗頭に、経済改革やＴＰＰへの大筋合意、ＥＰＡ交渉妥結などグローバル化の進展の中でまた新たな時代に突入します。ＩＯＴ・ＡＩによる技術革新など農業を取り巻く環境は大きく動いており、世の中の変化に対応する「適応力」が求められる時代となりました。

「適応力」を身につけることに関して、「虫の目、鳥の目、魚の目」という表現があります。これは、虫のように細部を注視し、鳥のように大局的に見て、魚のように動態的に観察する視点です。これら三つの目を同時にバランス良く持つことで、今の世の中がどのようになっていて、どちらに向かって進んでいこうとしているのかを的確にとらえることができ、時代の変化についていくことが可能になります。

「虫の目」とは、近づいて物事を細かく観察する力。様々な角度から複眼的にみる視点でもあり、現場の具体的課題解決に用いられます。「鳥の目」とは、少し引いた場所から全体像を俯瞰し、全体がどうなっているのかを捉える力、グローバルな視点で大局観を持つ力です。「魚の目」とは、トレンド（傾向）や時代の流れがこれからどのように動き、変化していくのかを見極め、先を読む力です。

皆さんは、農業大学校の毎日の授業や実習を通じて特に「虫の目」をしっかり培ってきたことと思います。学校で先生、仲間たちと関わり合いながら、考え、悩み、努力してきた過程で得た経験や学びは、社会に出た時に突き当たる壁を突破するためにきっと役立つことでしょう。

これからは、虫のように物事を深く掘り下げるだけでなく、鳥のように高い位置から自分を客観視したり、魚のように今自分がどの方向に向かっているのかを感じとり、「自分の目」を養って欲しいと思います。今はインターネットで調べれば、自分で考えなくても簡単に答えや情報が手に入る時代です。しかし、そんな時代だからこそ情報をうのみにして思考を停止するのではなく、情報を取捨選択し、自分の軸を持ってほしいです。

一九三七年に出版された吉野源三郎原作の小説「君たちはどう生きるか」が漫画化され、昨年から広い世代で大ヒットになっています。その中の一説に「僕たちは、自分で自分を決定する力を持っている」という印象的な言葉があります。

人生の舵取りは皆さん自身で行うもの。進路は違えども、農業大学校で学んだことに誇りと自信と持ち、常に三つの目を意識しながら、人生で出会うさまざまな局面で限界まで考え抜き前に進んでください。そして、「自分はどう生きるか」という答えをつかみ取っていってください。

ゼロからの挑戦

香川県立農業大学校
野菜園芸コース　一年
土屋舞子

私は一度大学を卒業して就職した後、農業大学校に入学しました。もともと子供のころから農業に興味があったわけではありませんでした。身近すぎて「仕事」として認識していなかったのだろうと思います。

我が家は香川県では標準的な農家、「五反百姓」でした。祖父は兼業で野菜を育て、鶏も育て、野菜や産まれた卵はそのまま食卓に並んでいました。私にとってはそれがごく当たり前の暮らしだと思っていました。

高校は普通科、大学は経済学部に進学しました。農業に関心を持った一つ目のきっかけが、大学のゼミでの活動でした。

担当の教授はグリーンツーリズムを専門としており、実地での活動を大切にしていました。その活動の一環として、高松で開催されているマルシェの企画運営・デザインを行う会社と、出展する農家さんと一緒にポップ広告づくりと販売を行いました。

農家さんやデザイナーさんと関わる中で、生産者にとっての「当たり前」

を、消費者の目線に立って文章やデザインに落とし込んで付加価値を付けることで、意外な効果や新たな顧客が生まれることを学び、面白いと思いました。農家さんの「紙ペラ一枚やけど、それがお客さんにとっては手に取る大事なきっかけなんやなあ」という言葉が印象に残っています。

他にも、体験型農業の先進事例であるモクモク手作りファームへの視察や香川県とともに行った里海・里山に関する冊子の作成を通して、農業の六次産業化や多面的機能について知るとともに、当たり前だった農業から、「地域を支える農業」、「仕事としての農業」という視点を得ることになりました。

大学卒業後は会社へ就職しましたが、帰りが非常に遅くなりがちな中、家族の病気の事情もあり、退社することになりました。これからのことで悩んでいたとき、祖父母が別のこともしてみたらと畑仕事や産直への出荷を手伝わせてくれたことが、農業に興味を持つ二つ目のきっかけになりました。

農家実習でキャベツ栽培の現場を学ぶ

祖父は、「作物はいい意味でも悪い意味でも平等。どんなにええ人が作ってもやり方を知らんかったらできん。嫌な人もやり方を勉強したら育つ。台風や雨も人を選んでは来ん。」と言っていました。それは私への励ましであり、また農業の難しさをつぶやいた言葉でした。それでも、自分で育てた野菜ができ、販売まで経験したとき、これを仕事にしたい、と強く思いました。自分自身が農業の担い手になりたいという思いから、農大への入学を決意しました。

四月からは野菜園芸コースに入り、肥料の計算、栽培、土壌について一から学んでいます。高校から農業を学んでいた同級生も多く、最初は経験の差に戸惑いましたが、先生や同級生が農具の扱い方から教えてくれ、全く知識のなかった私でも理解できるようになってきました。農機も扱えるようになり、夏季休暇に大型特殊や小型建機の免許も取りました。

十五日間の農家実習ではキャベツの大規模農家に実習に行き、プロの現場を体験しました。また、地元の特産であるニンニクを栽培している従姉妹の家で、栽培、収穫、出荷調整を手伝うなど、授業の外でも学ぶ機会を増やしています。

現在、私の暮らしている地域では、高齢化、若者の減少、耕作放棄地の増加といった課題を抱えています。将来は、家の畑五〇aからはじめ、二つの目標を目指します。一つ目は、「食卓までをデザインする」生産者になること、二つ目は、自分の暮らしてきた地域で農業を営み、「地域を支える農業」を守ることです。

そして最後に、農大での実習や農家実習、農業フェスに参加して、強く感じていることがあります。それは、農業は工夫次第で、年齢や性別に関係なく、地域の人々が、みんな一緒に活躍できる場になるのだということです。

私はそんな「地域みんなが輝ける場所」を、ふるさとである香川県に作っていきたいです。

高校と農大で学んだこと

香川県立農業大学校
花き園芸コース　一年
蔭山詞久

私が初めて農業とふれ合ったのは、農業高校に入学してからです。それまでは農業に関する知識や技術はありませんでした。入学して主に作物と畜産について学びました。一年から二年の一学期までは作物、牛、豚、鶏の順に週替わりの実習を行いました。初めて牛、豚、鶏などの家畜を見たときは少し怖かったのですが、先生から家畜の特徴や接し方を教えてもらって、少しずつ家畜にふれ合えるようになりました。二年の二学期からは、専攻実習で、養鶏部門に所属しました。専攻実習では、鶏の飼育方法や特徴、環境などについて学び、集卵や餌やり、水替え、床替えなどの一般管理全般の作業を行いました。また、鶏に害をなす「ワクモ」について、香川大学農学部の教授等から、生態や薬剤を使わない効果的な駆除方法などを学び、新たな知識や技術を身につけることができました。

農大に入学してからは、花き園芸コースで、花き栽培全般について学んでいます。高校時代に養鶏を勉強していたけれども、花きについて学ぼうと思ったのは、もともと花に興味があったことと、高校三年の時に農大のオープンキャンパスで、ヒマワリの出荷調整を体験実習で行い、この経験を通してもっと花のことを詳しく学びたいと思ったからです。

コースの実習では、花きの主品目であるキクやカーネーションの挿し芽、定植、摘心、芽かぎ、収穫調整などの

カーネーションの芽かぎ作業

基本的な作業のほか、クルクマや本県の特産であるラナンキュラス「てまり」シリーズの球根の芽出しや定植など独特な作業、切り花ハボタンの葉かき、鉢花の鉢上げ、鉢増し、病害虫防除などを行ってきました。

しかし、花きについては初めて学ぶため、聞いたことがない用語ばかりで、また、実習でも行ったことのない作業に苦戦し、思うように作業ができませんでした。それでも諦めずに努力し、日々の実習でしたことを次に活かせるよう作業日誌に具体的に記録、分らない所は担当の先生や専門科目の先生に質問して基本的な知識を身に付けることができました。

生産物の販売では、農大ふれあい市、農高フェスティバル、琴平町チャリティー作品即売展などのイベントに参加し、販売する切り花や鉢物などの準備を通して販売品目の特徴や栽培方法を学ぶことができ、お客さんに対しても戸惑うことなく特徴や栽培方法などの説明をすることができました。

十月から十二月には、農家実習で十五日間、主にコチョウランを周年出荷している加藤洋らん園で実習を行いました。ここでは、苗の箱出しやトレー並べ、施肥、殺虫剤施用、かん水、三本仕立てなど学校では実習したことのない作業を体験させていただきました。中でも一番大変だったのがコチョウランの三本仕立て作りです。コチョウランを固定する支柱を使用し、左右と中央の高さや向き、角度を合わせながらテープで支柱と花茎を留め、留める時に花茎が一本でも折れてしまうと商品にならず処分してしまうので、ひとつひとつ丁寧にやっていきました。最初は見本通りにきれいに仕上げることができませんでしたが、徐々にきれいに仕上げることができました。この時は、特に作業の大変さを実感しました。この農家実習では、加藤さんが作業内容を分かりやすく丁寧に教えてくれたので、最後まで作業に取り組むことができました。私にとってはあっという間でしたが充実した実習ができて良い経験になりました。

私は、将来、花きか鶏の農業法人に就職したいと考えています。作業機械や農業簿記など様々な資格を取得しスキルも身につけ、高校と農大で学んだ分野は異なりますが、今までの経験を活かしてこれからも様々な知識を身につけ、日々精一杯努力して頑張っていきたいと思います。

「自分の目指す農業」第一歩として

香川県立農業大学校
果樹園芸コース　一年
宮　武　萌

私が農業に進んだきっかけは、両親の影響が一番大きいと思います。父も母も農業とは無縁の家庭でしたが、大学時代に海洋系に進んでいて、動物や植物にとても興味を持っていました。小さい頃からそんな話を聞くたびに、生き物に関わる仕事がしたいと考えるようになり、高校は農業経営高校に入学して畜産を専攻し、牛や豚、鶏について学びました。しかし、畜産経営だけではリスクが高いと考え、違う分野の農家になりたいと考えるようになり、他にどのような農業があるかを調べました。その結果、果樹に興味が湧き、農業大学校に入学し、現在、果樹栽培を学んでいます。

入学したばかりの頃は、座学や実習で何故こんな事が必要なのかと驚きの連続で、授業について行けるのか、とても不安でした。しかし、先生方や先輩方に丁寧に指導して頂き、作業の意味や応用の仕方などが少しずつ分かるようになり、実習や座学が楽しいと思うようになりました。

実習や座学の他にプロの農家の方に来ていただく講演会では、農家になるまでの話や目標・これからの取り組み等の話を聴くことができ、将来の自分の糧になる内容でした。様々なプロ農家の話はとても参考になり、自分の目指す農業を実現させたいという思いが強くなりました。

また、自分の目指す農業のために資格取得も頑張ろうと思いましたが、簡単には取れないこともこの一年で学びました。次こそは必ず取ると心に決め、勉強していきたいと考えています。

他にも学校行事で、とても印象に残っているのは『農大ふれあい市』です。一般の方に自分たちが育てた果物などの農作物を買っていただいたり、模擬店で作ったクレープを美味しいと言ってくれた事など嬉しい事が沢山あ

農家実習でのミカン収穫作業

りました。しかし、同時に改善しなければならないところもありました。来場者のご意見も聞き、来年はより良いものにするために、販売だけでなく宣伝なども頑張りたいと思いました。

また四国地区農学連スポーツ大会は、先輩や後輩関係なく盛り上がりました。私はバドミントンで最初に負けてしまいましたが、次は一戦でも勝てるように頑張りたいと思いました。別の競技ではバレーがとても盛り上がっていて、応援にも、とても力が入り、見ているだけでも楽しいと思いました。次のスポーツ大会は香川県で行われるので、参加者が盛り上がれるように皆と協力していきたいです。

入学後、一番印象に残り、将来に役立つと思ったことは十月から十二月にかけて十五日間、農家の方や法人に農業はどういったものなのかを学ぶ農家実習です。実際にプロの農家に作業をさせてもらうと、学校でやっていることは基礎中の基礎だと思いました。一つ一つに無駄がなく、効率よく作業をしていて、ついていくのが精一杯でしたが丁寧に教えてもらい、ほんの少しずつですが作業が楽しいと感じました。他にも農作物を育てて売るだけでは経営が難しいこと、幅広い知識や情報収集も必要だということ、国や県の補助金などの制度の内容を理解し、どう活用すればいいかなど、将来、土地を持って農業をする場合に役立つ多くの情報を教えてもらいました。

この一年で私は将来に必要なものが何かを改めて知る事が出来ました。先生方や先輩、お世話になった農家の方へ、感謝し目標に向けて頑張っていきたいと思います。

農大で学んだこと

香川県立農業大学校
造園緑化コース　一年
山内　遼

私の出身は香川県ではなく、神戸市です。

なぜ、地元から離れた香川にきたのか。入学を決めた理由は、大きく二つあります。まず、造園科のある大学校が、香川と埼玉にしかないと知り家から近い香川を選びました。もう一つは、家を出たかったからです。小さいころから兄弟や家族とケンカするたびに、家出ばかりしていて気付けば家を出たいと思っていました。今となればケンカも少なくなり、むしろ地元がいいと思うようになっています。自分を鍛えるという意味でも家を出て正解だったと思います。

なぜ造園科にこだわるのかというと、高校のときは草花コースで花ばかり勉強していましたが、私にはずっとかなえたい夢があり、高校入学時からプロ野球選手を支える仕事に就くことばかりを考えていました。そこで考えたのがグラウンドキーパーでした。造園科はなかったものの、草花コースなら多少触れられると考え高校は草花コースを選びました。正直授業にはついていけないことが多かったです。それでもたまに行われるガーデニングの授業をひたすら楽しみにしていました。そのような経緯で造園科の学校に進学したいと思うようになり農大への入学を決めました。

農大に入学してからは、ひたすらグラウンド管理をしています。芝刈りをしたり、マウンドを移動したりと高校では出来なかったことをすることができました。私自身野球部に入っており、綺麗にしたグラウンドでのプレーはたまらなく気持ちがいいです。

また、ただ芝生を刈ったり、マウンドを移動させたりするだけではありません。プロのキーパーになるために、それぞれの作業をプロ基準で行っています。実際には野球場のように綺麗に出来ないですが、今できることは全て挑戦したいと思います。球場ごとに芝生の刈り方が違うので、「甲子園」をモデルにしたり、「ほっともっとフィールド神戸」をモデルにしたりして、どの刈り方が合うのか、どれが一番きれいなのかを調べています。また、マウンドや塁間は全て測り直し、正確な位置へと移動させました。さらに、マウンドの高さ、幅なども調べ、なるべくプロのグラウンドに近づけるように工夫しました。

卒業論文では、内野の芝生化、ベンチの作成を計画しています。無謀な挑戦かもしれないですが、それらを達成し誰が見てもきれいなグラウンドといえるグラウンドを作りたいと思っています。卒論をしながら夢に近づいていきたいと思います。実際に今グラウンドキーパーのアルバイトをしていますがプロの世界に甘さはないです。頑張ってもできないことばかりなので、心が折れそうになりますが、目の前でプロ選手を見ると自然とがんばれます。

私のモットーは、「好きなことで生

農大グラウンドの芝刈り

きる」です。興味を持てば手は離しません。ですが興味が無ければ触れる事さえしません。頑固な性格ですが、それを取り柄にし、決めたことを頑なに曲げず、挑戦し続けたいと思います。農大で学べることはしっかり身につけ、資格なども取り無駄な二年間とならないように残りの一年間を頑張りたいと思います。

農大で初めて触れた「畜産」

香川県立農業大学校
畜産コース　一年
永峰　はるか

私が香川県立農業大学校の畜産コースに入学しようと思ったのは、小さいころから動物、特に牛や馬のような動物が好きで、それらの動物について学びたいと思ったからです。また、将来は畜産関係の農業法人に就職したいと考えていたので、授業や実習で知識や技術を身につけ、さらに家畜人工授精師や農業簿記などの専門的な資格が取得できる農業大学校への進学を決めました。

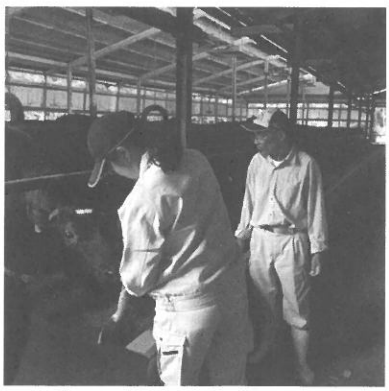
私は普通科高校出身で、畜産の知識はもちろん農業に関する知識もほとんどありませんでしたが、家畜解剖・生理や家畜飼養のような畜産専門の外に、農畜産業概論や土壌肥料など農業全般の基礎的な授業もあり先生方が分かりやすく教えてくれました。また、後で質問すればきちんと説明してくれたので、入学する前と比べて多くのことを学ぶことができました。英語・経済・社会等の農業以外の授業もあり、たいへん勉強になりました。

香川県立農業大学校では動物を飼っていないので、農場実習は農家さんにお邪魔させてもらって実習をしています。入学してから今までの間に、肉用牛と乳用牛、そして豚の農家さんで実習をしました。どこの農家さんに行っても作業を教えてくれるときに、「何故その作業が必要なのか」ということを丁寧に教えてくださり、実際に経験させてくれたり見学させてくれたりするので、授業で学んだことと結びつき、理解が深まりました。例えば牛の除角について、角があると、牛同士で突き合ったり、人に頭突きをしたりした場合に怪我をして危険だからと聞いてはいましたが、実際に牛と接していて頭突きをされたり、牛同士で突き合っているところを見たりしたことで、「このときに牛の角が切られていない状態だったら」と想像することができ、必要性をより深く理解することができました。

また、昨年十月から十二月にかけて十五日間、酪農家で農家実習を行いました。普段の農場実習では時間の都合上経験できなかった搾乳の作業を経験させてもらうことができ、また、人工授精や受精卵移殖をしているところを見学させてもらったりと、良い経験ができました。特に受精卵移殖については、夏に受けた人工授精の講習の中で少し話題にのぼることはあったものの、詳しいやり方は学んでいませんでした。まして実際に受精卵移殖をしているところは見たこともなかったので、見学させてもらえて、勉強になりました。また、農家実習に行ったことで、出産や人工授精のような定期的ではない作業があっても毎日同じ時間に同じ要領で搾乳やエサやりなどの決まった仕事をこなす酪農家の厳しさと偉大さを知ることができました。

来年度からは専攻実習が始まり、畜産試験場での実習が主となります。私は酪農家への就職を希望しているので、畜産試験場内で酪農・肉牛を選択したいと考えています。また、大型特殊自動車の免許や農業簿記の資格など、資格取得にも力を入れたいです。

残り一年という短い期間ですが、できる限り多くの知識や技術を身につけることができるよう、精進していきます。



畜主の指導の下での餌やり

私が描く農業について

徳島県立農林水産総合技術
支援センター農業大学校
1年次生　生産技術コース
後藤　あゆみ

私は、徳島県の神山町に住んでいます。神山町は、県庁所在地の徳島市内から車で三十分程度のところにあり、「中山間地域」で四方を山に囲まれた自然が豊かなところです。

神山町は、徳島県の特産品として有名な「すだち」の一番大きな産地で、「雨乞いの滝」や「神通滝」という地形美でも有名です。

また、ブロードバンド環境もいいです。そのため、東京などの大都市に本社を置くＩＴ企業がサテライトオフィスを多く構えていることで有名です。

私の家は非農家です。しかし、家の近所には農家が沢山あります。そのため、幼いころから野菜や果物に触れる

機会も多く、それらの栽培方法に興味を持ち、高校進学に際し迷わず農業高校を選択しました。高校に入学した頃、私には、農業の技術はあまりありませんでしたが、高校で野菜栽培や果樹栽培について学び、技術を深めてきました。

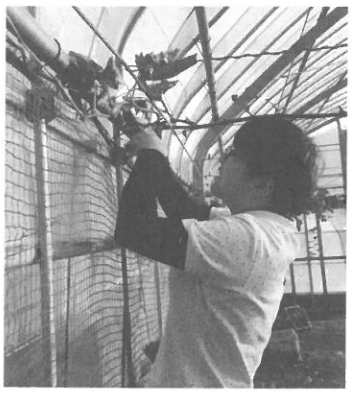
なかでも、ブドウ栽培の楽しさや苦労を味わい、ブドウ栽培の魅力に取り込まれました。そして、消費者が食べると笑顔になる美味しいブドウ作りが出来る生産者になることを目指していきたいと考えていました。

現在は、農業大学校で本格的にブドウ栽培について学んでいます。

主に研究したいことは、「ブドウ施設栽培の安定生産」についてです。

ブドウ栽培を深く詳しく学び、将来新規就農し新たにブドウ園を開きたいと思っています。

栽培する品種は、「シャインマスカット」、「甲斐美嶺」、「ピオーネ」です。一番力を入れたいのは、四品種目として目玉となる新品種を開発し販売することです。赤玉品種で「シャインマスカット」のような食感があり皮まで食べられる品種を目指します。


ハウスでブドウ栽培

名前は、「咲希クイーン」と名付けたいです。

理由は、花が咲く事は植物にとって希望だからで「巨峰」×「竜宝」を掛け合わせて作りたいです。この品種は巨峰を主に竜宝の花粉を人工授粉し行いたいです。

「巨峰」×「巨峰」で自家受粉の「安芸クイーン」に憧れを抱きこのような品種になることを目指しています。

新植でのブドウ栽培は難しいです。ですが、比較的管理もしやすく栽培しやすいので、短梢剪定栽培で行いたいです。

しかし、ブドウは収穫できるようになるまで約三年もかかります。ブドウを収穫出来ない期間は収入がありません。果樹栽培は樹形が大きくなるまでに時間がかかります。

観光ブドウ園のメインターゲットに、子供のいる家族連れや高齢者の方を考えています。また、高齢者の方が訪れやすいようにユニバーサルデザインで行います。

ブドウ狩りだけでなく、青果物も販売します。観光農園、青果物販売、契約販売の開拓を行います。

また、ブドウを使い六次産業化も目指しています。地域の人とつながり地域の産業とともに発展する経営者を目指します。

新規就農するとなると、ブドウ栽培の技術を磨くだけでなく、経営力も身につけ法律の知識や簿記の知識も必要で、農地を借りる時の借地契約、パートさんや正社員を雇う時の雇用契約などの知識も学ばなければなりません。

私は、「もうかる」ブドウ園を経営し、私が住む徳島県への地域貢献をするという夢の実現に向けていきます。

人々に農業の素晴らしさを伝えます。

この夏、花卉農家に訪問したさいにその農家の方から頂いた言葉があります。「人と人の繋がりは大切にしろ、大切にしたらいつまでも続いていける。」という言葉です。その言葉を頂いてからより一層ブドウ園を開きたいと思うようになり農業に取り組んでいます。

農業は、私を前に出るように背中を押してくれました。農業は私の人生を変えてくれたように、農業には人の心を動かす力があります。農業はどんな時代にも存在します。時代の先端を走り、時代を彩る、一番輝いている産業です。

農業は産業の先頭を走り未来に続いてきます。

私も、農業者の一人として農業を楽しみ、魅力を伝え農業の無限大の可能性を追求していきます。

世界でいちばん変わった農業者になりたい！

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
1年次生　生産技術コース
江口愛実

「食生活で病気が治る」そんな夢のような話を聞いたことがありますか。実際に多くの人が、食生活を変えることで病気を治しているのは事実であり、特定疾患病と診断された私がその一人でもあります。

私に転機が訪れたのは二十一歳の時です。「癌で闘病生活を送っていた人が癌を克服し元気に過ごしている」と聞いた両親が、その人と私を会わせてくれました。なんと癌を治したその方法は、水と食べ物と生活を変える事でした。鉱石水を毎日飲み、酵素で栽培された食べ物を口にいれる私の生活が始まりました。最初は馬鹿にしていましたが、その生活を続けるほど、不思議と具合が良くなってきていることを実感しました。そして、定期検査では少しずつ数値が正常に戻りはじめ、半年後には医師に「服薬なしで数値が正

常になり、しかも症状も出ていないなんてあり得ない。」と言われました。「病院では、病気の対処療法しかできないけれども、水と食物で、病気は治すことも予防することもできる」と体感し、私は農業をするために徳島農業大学校に入学しました。

現在、私の祖父母の農業は、ラジウム鉱石と酵素を用いた農業に変わっています。その主な農作物は、稲作です。一般的な稲作と異なる点は二つあり、一つは選定した稲の種を、水・ケイ素・ラジウム鉱石が入ったバケツに一週間浸けておき、苗を育てること。そして二つ目は田植えの準備期間に、肥料と酵素を田んぼに散布し、代かきをすることです。一般的に栽培されるお米と比べると、ラジウム鉱石と酵素を用いたお米は、甘みが強くもっちりとしており、艶があります。一言で表現するのであれば、「とても美味しい」としか言いようがありません。確かに、それを証明する具体的な根拠はありませんが、私も家族もそして祖父母も、「ラジウム鉱石と酵素を用いた食物は美味しく、身体に良い影響をもたらす！」と信じています。

コース研修旅行にて

私が今、抱いている夢は三つあります。一つ目は、さきほど説明したラジウム鉱石と酵素を用いた栽培の、具体的な根拠を示すことです。徳島農業大学校では、各自で課題を定め、自主的に学習するプロジェクト研究があります。そのプロジェクトとして、ラジウム鉱石と酵素を用いた栽培と一般的な栽培との、甘み・匂い・食感・生育の違い等を調査しようと思っています。プロジェクト研究だけで、具体的な根拠を示すことが出来るとは思いませんが、周りの人達の目を変えるその第一歩に繋がれば嬉しいです。二つ目は、小さい頃からの願いだった、祖父母と共に農業をすることです。徳島農業大学校卒業後は、稲作はもちろんのこと、徳島の名産であるスダチやスナップエンドウも一緒に栽培したいと思っています。また稲作については、JA出荷だけではなく、付加価値をつけた直接販売にも力を入れていきたいです。そして三つ目は、世界でいちばん変わった農業者になることです。ここで言う「変わった農業者」とは「変わり者」という意味なのですが、今でさえラジウム鉱石と酵素を用いた栽培の話をすると、学生だけではなく先生にも笑われることが多いです。しかし、ラジウム鉱石と酵素が起こす奇跡と力を、自身の実体験から信じざるを得ない私がいます。美味しい野菜・果物・穀物等を栽培したいと考える農業者はたくさんいると思いますが、私は「美味しく健康に良いものをつくる」農家・農業者になりたいです！

農業大学校での思い出

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
2年次生　生産技術コース
船崎賢汰

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校に入学して、はや二年が経とうとしています。私は普通科高校出身で、高校では三年間野球部員として日々練習に励んでいました。

そんな私が農業大学校を志すきっかけになったのには、家族の影響があります。私の家は、兼業で稲作をしています。また、父親は農協の職員で、私は幼い頃から農業というものに触れてきました。私は、高校を出てそのまま農協に就職しようと考えていましたが、農業についての知識が少ないままではダメだと思い、農業大学校に入学を決心しました。

入学当初は、周りはほとんど農業高校出身で、正直ついていけるかどうか不安でしたが、仲間や先生に恵まれ、農業についての知識を楽しく学ぶことができました。また、自治会活動では、書記係を務め、自治会長の手助けができるよう頑張りました。四国農学連スポーツ大会では投手として頑張りましたが、結果は一回戦敗退と悔しい結果に終わりました。そして、初めての農大祭では、2年次生と協力して記念すべき第五十回にふさわしいものとすることができました。

二月には、プロジェクト発表会の全国大会で司会を務め、そして、卒業式では、お世話になった先輩方と最後の交流を深めました。

気がつけば、本当にあっという間の一年間でした。自治会役員としての仕事もあまり覚えられないまま、本当に2年次生におんぶに抱っこだったと思います。そんな私ですが、前自治会長から『自治会長を任せたい』という話をいただきました。最初は向いてないと思い断りましたが、周りの人たちの

昨年度の卒業式で在校生代表として送辞を読む

後押しを受け、引き受けることを決断しました。

自治会長船崎としての新たな学生生活が始まりました。最初の仕事である新入生歓迎会では、仕事の多さに驚きながらもなんとか成功させることができましたが、農大祭ではあまりの忙しさに途中で投げ出したくなる時もありました。そんな時支えてくれたのは、やはりクラスメイトや後輩でした。買い出しやテント張り、みんなのおかげでスムーズに準備が進み、二日間開催された農大祭では新たなイベントも加え、大盛況で幕を閉じました。

農大生活も卒業式を残すばかりとなり、農業技術の習得を目標に入学を決めた農業大学校ですが、今となっては何気ない学校生活も最後かと思うとなんだか寂しく感じます。そして、こうして大学生活を送れるのも家族の支えや、二年間ともに過ごした仲間、後輩、ご指導していただいた先生方のおかげだと、すべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。また、農協ではありませんが、農業関連企業への就職も無事決まりました。農業大学校での二年間は、私にとってかけがえのない思い出で一生の財産です。

徳島農大に入って、徳島農大そらそうじゃ社長として

徳島県立農林水産総合技術支援センター農業大学校
2年次生　地域資源活用コース
藤本悠真

ぼくが農大に入ったのは、高校が農業高校だったので、高校で学んだことを更に勉強して、いつか自分が学んだことを無駄にしないよう、自営就農してみたいと考え、農大に入りました。実習半分、座学半分をウリにしている農大に入ってからは、高校の時よりも実習が増え、最初は体力もついていけず、みんなと協力しながら実習をこなし、共に育てた農産物を収穫、出荷調整、販売などの実習をしていました。何気なく出荷調整し、販売をしていましたが、それを自営で農業をしながら行うのは容易ではないだろうと思っていました。その裏には、私の学校に存在して、なおかつ、ぼくも所属している、学生全体が社員となってとりくむ、模擬会社「徳島農大そらそうじゃ」があるからこそ簡単に販売活動が行えることを知りました。

そらそうじゃは、「きのべ小屋」と名付けている学校の敷地内に設置した販売所で、「きのべ市」として産直市を定期的に開市し、お客さんとコミュニケーションを図りながらその日に採れた新鮮野菜をお手頃な価格で販売しています。さらに、「出張きのべ市」として、県内や県外のイベント等への販売実習にも出かけています。

ぼくが農大に入って一年目の秋、冬の寒さを肌に感じるようになりはじめていた時期に行われた農大祭。その頃より少し前から高校の頃に生徒会長をしていたこともあり、次のそらそうじゃ社長は君かもね、と先生方や先輩から期待をかけられていました。そんな時に農大祭のイベント「叫べ、将来の目標」に出場してみないかと声をかけられたので、その場で、「来年度の社長を任されるように頑張ります。」と社長を前にして、ステージの上で叫びました。結果、そのイベントでの最優秀賞として表彰されたこともあり、みんなからの期待は更に大きいものになったと思います。その後、社長に就任するまでは、「社長が何をしていたのか。」とか、「そらそうじゃという会社はどういった活動をしていたのか。」などを、社長がいる間に可能な限り教えていただきました。

社長が任期を終え、卒業し自分自身が新社長になる前、社長と同じように振る舞い、同じように運営できるだろうかと心配で仕方がありませんでした。実際社長になってみて、新学期、新入生を迎えたり、今までの先輩が抜けた状態でそらそうじゃを運営していくのはとても難しく、悩みました。先輩から教えてもらったことをこなしながら、後輩に伝えていく、途中自分たちが理解できていなかった部分があったりしましたが、そこは自分なりの方法を新たに試行錯誤してみました。

そしてぼくたちの二度目で最後の農大祭、ぼくたちが先頭に立ちみんなで

農大祭「叫べ将来の目標」で最優秀賞を受賞

運営する。ぼくはそこでそらそうじゃ社長として、ぼくたちが作った農産物販売の担当リーダーとして健闘しました。前年度も農産物販売の担当をしていたこともあり、改善点を自分たちで挙げ、改善し、前年度よりもスムーズに販売を行えた時の達成感はとても良いものでした。販売終了後は、来年度の後輩のために今年度問題となった部分をまとめ、来年度へ残していくべく、一緒に販売した皆と反省会、取りまとめも行いました。今年度が農大祭一回目の1年次生から、「お客さんとふれあい、お客さんの喜ぶ顔が見られてとても充実した気持ちになった。」と聞いて、販売の担当リーダーとしては嬉しい気持ちになり、そういう気持ちはぼく自身も大事にしてるので、やはり大事だなと思いました。

今年度も終わりが近づいてきて、去年の今頃は先輩から期待をかけられていた時期だったのを思い出します。それが今では一年経ち、次はぼくたちが次の世代に繋いでいこうという時期です。今年度一年間を通して前年度の社長と比べ、良い功績を残せたか分かりませんが、農大祭が成功したことを始め、今年度も良い「徳島農大そらそうじゃ」だったのではないかと思います。次の世代にも期待し、伝えられることはすべて伝えたいと思います。

社長に一年間付いてきてくれて、ありがとうございました。学生としても二年間お世話になりましたと、我が母校となる農大に伝えたいと思います。

『自治会会長としての一年を振り返って』

愛媛県立農業大学校
総合農学科二年果樹コース
一宮 悟郎

私は、昨年四月より愛媛県立農業大学校の自治会長に就任しました。会長となって間もない頃は、自治会をどのように運営していけばよいのか戸惑いましたが、今は仲間や先生方と協力して運営しています。

自治会運営のうち、力を入れている活動は三つあります。一つ目は高校生を対象とした、一泊二日の就農啓発講座です。今年は県外の高校からも参加があり、作業体験のほか、食事会や意見交換等を行いました。また、私たちが普段生活している学生寮に一晩泊まってもらい、実際にどのような環境で過ごしているのかを体験してもらいました。

二つ目は、四国農学連スポーツ大会です。愛媛農大は毎年、それぞれの部で優秀な成績を収めてきましたが、今年はバレーボール、バドミントン、卓球の三種目で優勝することが出来ました。これは、学生が一丸となって練習に取り組み、また応援に取り組んだ成果だと思います。

三つ目は、農大の目玉と言えるイベント、収穫祭です。今年も三千人以上の方々が来校して頂き、学生みんなで来ていただいた方々に喜んでもらえるよう心掛けました。農大産もち米を使った餅まきや収穫体験、小学生を対象としたスタンプラリー等を実施しました。大人から子どもまで幅広い年齢層に楽しんでもらい、私達の活動を地域の方々に知っていただけたのではないかと思っています。

私の家は柑橘農家で、祖父・祖母・母・兄の四人が経営を行っています。私も農大卒業後は経営に加わり家を継ごうと思っています。現在一・五ヘクタールの農地ですが、就農後は少しずつ面積を拡大していき、三ヘクタールまで拡大したいという目標があります。農大で学んだ事を活かしていけるよう頑張っていきたいと思います。

今年度を振り返ってみると、月日の流れをとても早く感じるとともに、自治会長に就任以来、充実した毎日を送ることが出来ました。自治会長になり、様々な問題に対して色々な方々に支えられ、成長できたのではないかと思います。まだまだ未熟なところがあり、迷惑をおかけしたこともありましたが、愛媛農大で学生自治会長に就いて良かったと思っています。皆さんありがとうございました。次代の自治会長には、これまでの会長達の思いを受け継いで頑張って欲しいと思っています。最後になりますが、これからも全国の農業大学校並びに愛媛県立農業大学校の発展を強く願っています。

果樹コースの仲間と

『農大に入学して』

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　畜産コース
一ノ宮 夏美

私は動物が好きで動物のことを学びたいと畜産科のある高校に入

学しました。元々家畜よりもウサギやポニー等の愛玩動物に興味があり、高校では養鶏・愛玩動物の小家畜班を専攻していました。しかし、授業で酪農・養豚・養鶏を学び、次第に愛玩動物から家畜に興味を持つようになり、現在の農業大学校に進学しました。

農大には畜産に関する施設がないため、主に畜産実習は学校外の畜産研究センターや養鶏研究所でお世話になっています。私は酪農を専攻し、講義以外は朝の給餌から夕方の搾乳までの作業を行います。高校と大きく違うところは、学習の場に獣医・研究員の方がいることです。その為、牛の乳房炎の医療・AIの様子などを実際に見学し、分からないことがあれば質問することができます。教科書で学ぶ内容を実際目にすることで、更に理解を得られると実感しました。

特にそう感じるのが家畜解剖の講義です。講義は研究センターの方にしていただくため、教材として屠畜された雌牛の生殖器を解剖する講義がありました。実際に自分の手で触り、解剖し、直腸検査に必要な子宮頸管や卵巣の卵胞・黄体の感覚を確認します。直腸検査は牛の種付けをするのにとても重要な検査になります。しかし、いざ直腸に手を入れるとなると子宮角が分かっても、肝心の頸管や卵巣が見つけられない時が多々あります。そんな時に実際にAIを経験されているからこそ分かるセンターの方に教えていただき、直腸検査の感覚を養う良い経験になっています。私は高校で家畜人工授精師の免許を取得しているため、来年度実施される受精卵移植の免許を取り、更に畜産への知識を深めていくつもりです。

現在、一年生で畜産を専攻している学生は私一人です。二年生に畜産を専攻されている先輩はいますが、課業内容が違うため私一人の場合もあります。授業は先生とマンツーマンで行うため、普段の大人数の授業とは違った感覚です。一人だと心細い時もあります。専攻が別れた頃は一人なのが心配で嫌でしかたありませんでした。しかし、少人数で実習するとメリットがあることに気が付きました。大人数での作業となるとどうしても手持ち無沙汰な人が出てくる時があります。一人だと暇を持て余す時間も少なく、その間作業の知識やコツも丁寧に教えていただけるので、その分スキルアップができます。

子牛に授乳中！

加えて、農大の友達、先生方の存在の有難さを強く感じます。私は普段、畜産実習以外の時は果樹コースの方で実習をしています。今まで畜産ばかり学んでいたので果樹に関しては無知の状態です。そんな私でも丁寧に教えて下さる先生方や友達がいるので、とても心強いです。農大での実習は、畜産と直接関係はないですが、剪定で果樹の観察をするのも、畜産に置き換えて考えると家畜の観察をするのと同じことで、観察する力を養っていると思っています。また「農大は社会に出るまでの準備期間」と言われた先生がいたように、農大は農業の知識を学ぶだけではなく、作業中の協調性やコミュニケーション力を身につけるには最適な場だと思いました。

最後に農大生活も残り一年となった今、有意義に時間を使っていきたいと思います。卒業後は農業生産法人への就農に向けて、この一年よりも更にレベルアップできる一年にしていきます。

農業を広めるために

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　果樹コース
上野瑞穂

私の家は農家ではありません。だから、野菜やお米の作り方もよく分からないし、農業用の機械の操作も分かりません。農業の大変さはもっと分かりません。

農業という自分の全く知らないことについて勉強しようと思ったのは、きっと祖父母の影響だと思います。私が幼い頃、祖父母は農業を営んでいました。野菜やお米を主に作っていて、よくもらっていました。中でも、お米だけは毎年一年分もらっていたのでスーパーなどの店で買うものではないと思っていました。しかし、小学生のときに、「もうお米は作らない」と祖父に言われました。来年から祖父の作った、おいしいお米が食べられなくなると分かったとき、とても悲しくてその日の夜に、「もし両親も親戚も農業をしないのであれば、自分が田畑を譲り受けてお米を作る」と両親に豪語したことを今でも鮮明に覚えています。その頃から、農業について興味を持ち始めたように思います。

農業大学校に入学してから、北海道

研修や先進事例研修を通して、今まで自分が知らなかった農業の一面を知ることができました。北海道研修では、士別市にある農家さんのところに二週間ホームステイをして、大規模農業を実際に体験することができました。そこで印象に残ったことの一つが、北海道でさえも農家数が減少しているということです。私がお世話になった藤田さんのご近所にも、かつては一〇軒以上の農家がありましたが、今ではたったの三軒にまで減ってしまったそうです。日本の食糧庫と言われる北海道でさえ農家が減少していることに驚きました。私の想像では、日本の農家数は年々減っているけれども、それは都市近郊や中山間地の話で、農業が盛んな地域ではあまり関係のない話だと思い込んでいました。藤田さんからそのような話を聞いて、日本の農家数がとても減っていることを実感しました。先進事例研修では、県内の様々な企業や法人に行き、そこで働いている方のお話を聞くことができました。中でも印象に残っているのは、有限会社ジェイ・ウィングファームの社長さんの「本当に農業をやりたい人達のためにやっている」という言葉です。ジェイ・ウィングファームでは、農家の方から田畑を借り入れて、水稲、麦などを育てています。現在多くの農家では、効率を上げるために整備された圃場を望んでいます。ジェイ・ウィングファームでも大きな機械を取り入れて大規模に作業をしていますが、実際に借り入れている圃場は三角形などの小さな圃場の方が多いそうです。小さな圃場では、どうしても手作業が多くなり、しんどいと思うことも多いものの、農業をやりたいのに年齢や体力などの問題などによって、続けられない方々から農地を借りているので、そのような方たちの為にももっと綺麗に植えて、美しい農作物を作ろうと心がけているそうです。その結果、今では、田んぼを見に来たほかの農家からも、是非、うちの田んぼもお願いしたいと言っていただけるようになり、農業にやりがいを感じていると仰っていました。

今、日本の農家で大きな問題となっているのが後継者不足です。実際、私の家の周りにも耕作放棄地が多く見受けられるようになりました。しかし、単に後継者と言っても農業のノウハウが分からなければ意味がありません。かといって、知識のある人が新しく農業を始めようとしても相当な額の初期費用が必要になるというのが現状だと思います。この状況を変えなければ、次第に農業が衰退していくのは明らかだと思います。では、どのようにすれば良いのでしょうか。それは、私たち若い世代がもっと農業を身近に感じて興味、関心を持つことが大切になってくると思います。その上で、行政によってもっと農業を始めやすく続けやすいように、支援を行うことが重要になってくると思います。また、私は、農業は人の手で行うものだと考えています。作物の状態をデータ化することにより、水やりや施肥などの適切なタイミングなどは分かると思います。しかし、全てをデータに頼ってしまっては農家それぞれの良さを引き出すことができず、後継者不足を解決したとは言い難いと思います。

日本の農家の多くは世襲制度をとっているところが多いと思います。確かに、家族で農業を続けていくことは素晴らしいことだと思います。しかし、それだけでは少子高齢化社会という点から考えてもこれからの農業を支えていくには限界があるように思います。そこで、新しい農業の担い手が必要になってきます。農業は一日二日やっただけでは何も習得できないものです。長い時間をかけて失敗と成功を繰り返して初めてできるものだと私は思います。だから、新しい農業の担い手は今から始めたとしても何年もかかると思っています。

ただし、今の話は新しく農業を始める人がいるということが前提になります。もし、そのような人が一人もいなければ意味がありません。まずは多くの人に農業について興味、関心を持ってもらうことが必要になってきます。地域のイベントや学校の授業などで田植えや野菜作りを行っているところはありますが、そのような機会を県内の様々な地域で数多く行うことによって、多くの人に農業を知ってもらうことができると考えます。

また、熟練の農家が若手の農家を教えるという仕組みを作る必要があると考えます。このような仕組みが上手くできていないことも後継者不足につながっているのではないかと思います。

このようなことから、後継者を育てつつ、多くの人に農業を知ってもらうために、私は六次産業化に取り組む会社を立ち上げたいと思います。会社を設立することによって、まず人手が集まり効率的に農業を行うことができま

作業合間にひと息

す。また、自分たちの会社で田畑を持つことによって、高い頻度で収穫体験などのイベントを企画、運営することができ、子供から大人まで年齢を問わずより多くの人に知ってもらうためのきっかけを作ることができます。さらに、個人農家よりも人手が多く集まるため、播種から収穫、販売までをスムーズにかつ効率的に行うことができます。また、一度に多く収穫できるため、直売だけでなく学校の給食など、多くの方に大量に農産物を提供することができます。したがって、個人で農業をするよりも会社のように組織で行った方が、後継者不足を解消することにつながると考えます。

何故、六次産業化にこだわるのかというと、近年、海外の安い農産品が大量に輸入されている現状では、日本の農産品に何かしらの付加価値を付けないと太刀打ちできない状況となり日本農業の衰退が更に加速してしまいます。

これらのことから、私の会社設立という夢の実現に向かっての第一歩は、農業についての様々な知識を、どん欲に身につけることだと思います。そして、身に着けた知識を周りの友人や家族に話すことから始めようと思います。また、今現在行われている農業関係のイベントやボランティアなどにも、積極的に参加して見聞を広めたいと思います。そうして、一歩ずつ夢に向かって歩んでゆきたいと考えています。

日本農業に活気を！

愛媛県立農業大学校
総合農学科一年　果樹コース
髙野良基

私は、過疎化が進むと懸念される瀬戸内海の島々において、農業企業の普及を中心とする地域コーディネーターとして、また、グローバル社会において、競争力の高い農産物の生産を行う担い手の育成にも力を注いで行きたいと考えています。

そのように考えるようになったきっかけのひとつは、瀬戸内海の農業の特徴や人口減少について学習したことです。農業においては柑橘栽培が有名であり、全国トップクラスの産地です。柑橘にはβクリプトキサンチンなどの発がん性物質を抑制する作用など、健康によいとされる栄養素が数多く含まれています。そこで、様々な人に柑橘の需要を増やし、消費者の健康増進につながる柑橘栽培を保護できると考えました。

私の卒業した広島県西条農業高校では、国際性を養うとともに、海外の農業企業で大型機械を用いた農法や大学で遺伝子組み換え技術などの先進的な農業を体験し、将来の日本の農業を担うことを目的として、海外研修を積極的に行っています。私は、高校で二度アメリカ合衆国への研修に参加しました。

日本の農業をアメリカの視点で考えるという意識で臨んだことから、日本とアメリカの農業のスケールの違いが強く印象に残っています。今まで見えてこなかった農業や経済などのストロングポイントを磨くことで、新たな活気のある日本の農業につながると思いました。

まず、農業経営です。日本では農場運営や畜産業は家族経営が未だ多く。一戸一法人も目立ちます。一方、アメリカでは企業やグループでの経営が台頭しており、効率的に高い利潤を得ています。またプライベートブランド化を進めることにより価格を抑え、消費者の購買意欲につなげる取り組みを大々的に行っています。

私が研修を行ったシカゴは、アメリカでもトップ五に入るほど大都市です。そのシカゴにあるイリノイ州は農業が盛んな地域でもありますが、産地と消費地が隣接しているため、輸送費のコストダウンが見込めます。ご存知のように、アメリカは郊外の広大な土地で農業経営を行っています。アメリカ経済を支える屋台骨が効率的なハイウェイという形で張りめぐらされています。また、巨大な貨物列車が一日に二本、物資を運んでいる光景を見かけました。私の前を十数分かけて移動していく姿に大変驚くとともに、グローバル展開の奥深さを学びました。

日本には、耕作放棄地などにより、遊休地という宝が眠っています。しかし、その効率的な活用や経営の大規模展開は困難を極めます。アメリカで学んだ物量的農業経営は残念ながら愛媛での農業にマッチングしません。さらに、箱物を優先し、道路網などを整備すれば生態系を崩しかねません。

そこで私は土地代の安い過疎地の活用と差別化農産物生産の取り組みを進めることで瀬戸内海の島々を守って生きたいと考えています。差別化農産物

北海道実習でトマト収穫

の具体的な取り組みとしては、ノルウェー産のアルギットという海草を使用し、瀬戸内海の島々でアルギット農業を用いた柑橘栽培を行いたいと思っています。アルギットはノルウェーに生息しており炭水化物などの様々な栄養を蓄えているため氷点下の海でも凍らず、植物の肥料としても優れています。アルギットの成分は、多糖類やミネラル、ビタミンを豊富に含み、土壌微生物を増殖し、農薬や化学肥料の多用や連作障害などで疲弊した土をよみがえらせます。よみがえった土に根を張って育った農作物は、味はもちろん、風味、香りにも優れ、収穫量の増加も期待できます。

高校では、栽培が難しいとされるシクラメンをアルギット農業を用いて栽培し環境不適地で七号鉢まで大量に生産することができました。実際にみかんでは、和歌山県の有田みかん、静岡の三ケ日のアルギットみかんは差別化をしており、柑橘にも代用が可能だと考えました。

私が愛媛県立農業大学校に入学して八ヶ月たちました。日々の実習を通して、様々な柑橘や落葉果樹にかかわる知識・技術を教えていただいています。九月に二週間北海道の士別市の農園で研修をさせていただくことが出来ました。北海道はアメリカと同じ物量的大規模農業を行っています。私は「かわにしの丘しずお農場」さんにお世話のなり、少ない従業員にもかかわらず、広大な土地を管理され、自社で作った農産物を直営のレストランで消費したり、ブランド化を行い士別市の宣伝に貢献したり、スーパーなどに直接販売している六次産業化を実践されていました。また、食用ほうずきという新しい品目に挑戦されており、様々な栄養素が含まれているため体によい食べ物として注目されていました。その研修先で一番農家が大変だとおっしゃっていたのは、販売先を見つけ安定供給をすることだそうです。愛媛県にあるジェイ・ウィングファームでは米栽培を中心に地域住民からの委託により管理の難しい水田を手入れしています。この二つの農業団体に共通していることは、その土地にあった効率的な農業経営を行っていること、地域との関わりを大切にし、地域農業・町を支えていること、なにより、従業員さんたちに笑顔があふれ辛くて大変な農作業をみじんも感じる事のない環境です。

これらの様々な経験を活かして、卒業後は、アメリカ農業海外研修に参加し、英語・農業技術・経営について学び、帰国後は、瀬戸内海の島々の柑橘栽培を支え、日本だけでなく海外にもシェアを拡大し、「日本農業に活気を与える」そんな経営者に私はなります！

オランダ派遣研修を終えて

高知県立農業大学校
園芸学科二年　花き専攻
松岡寛人

本校の学生七人は、昨年の十二月十一日から二十一日までの十一日間、オランダのウエストラント市にあるレンティス校での研修を通し、オランダの進んだ園芸農業を学んできました。レンティス校では、オランダの学生と一緒に授業を受けました。学生たちはとてもフレンドリーで、言葉が十分ではない自分たちにとって話しやすかったです。授業はクイズ方式の遊びも取り入れたもので、楽しく勉強できたことが、とても印象的でした。

オランダでは多くの企業も視察することができました。最初に行ったのは世界一の花き市場、フローラホラントです。オランダの各地の農場から集まった花だけでなく、アフリカやインド等世界中から様々な花が集まっており、その規模と多様性に圧倒されました。市場のセリも見学させてもらいました。セリは、台車単位で行われ、中には画像でのセリもあるそうです。日本のセリ風景とは異なり、静かなものでした。そして日本以上にネット取引が九割を占め主流となっており、実際のセリ現場には一割のバイヤーしかいないということでした。市場内に美容室や飲食店もあり、小さな町のようでした。

また、オランダの企業農家も視察することができました。その中で特にオランダの園芸関連の農業設備はとても勉強になりました。オランダの農業の特徴は、生産規模の大きさと生産効率の高さです。常に無駄をなくす努力をしていることです。オランダでは機械化が大変進んでいて、圃場管理ではほぼ百%自動化されていました。また、環境への配慮も進んでいて、植物に与える水は雨水を利用したり、また、底面給水を行った後にフィルターを通して浄化し、再利用したりと、ほとんど無駄がないと感じました。

オランダ研修一行と（於：アムステルダム）

また、このような大規模かつハイテクな農業を運営していくには、膨大な資金が必要です。資金は主に銀行からの融資によるとのことで、経営計画がしっかりしているのだと思いました。その他、経費節減のために、天然ガスを用いて暖房していますが、余剰のエネルギーは発電に回しており、余った電力は地域に売却しているそうです。

日本では農家の人口の減少、高齢化が深刻です。その中で農家の労働力の不足を補うために、機械化を進めていくべきだと思いました。そのためには、一定の大規模化が必要だと思いました。企業経営の農家の圃場、特に鉢物生産では常時雇用している社員は少なく、忙しい時に雇用を入れて対応しているとのことです。

オランダでの花の売り方にも驚かされました。ラメをまぶしたり、染色された花が多いのに驚きました。好みの違いもあるようですが、花の用途を広げる面白い試みだと思います。また、私達の訪問時に、オランダはクリスマス商戦がたけなわで、ありとあらゆるクリスマス商材が展示されていました。

今回の研修では、オランダと日本の園芸農業の差を痛感しました。こうした差がどこから来ており、将来どうなっていくのか？非常に興味深いことで、また、日本の園芸農業の今後の姿についても思いを巡らすことが多かったです。オランダの優れた技術は積極的に取り入れながら、日本独特の花材やオリジナル品種を育成したりすることも必要だと思いました。自分は将来花で生活していきたいと思っています。外国からも学ぶためには、語学力を高めたいと思いました。今回ホームステイしましたが、十分英語を理解できず、いろいろな人に迷惑をかけ、思うような交流ができなかったことが残念です。これを機会に自分も英語を勉強し、外国の人とも交流できるようになりたいと思います。そして、必要な技術や知識を自分の経営に直接取り入れ将来の農業を発展させ、良くしていきたいと思いました。

私の目指す農業

高知県立農業大学校
園芸科一年　野菜専攻
小松千誉

私は農業大学校を卒業してから実家の仕事、農業を継ぎたいと考えています。

私ははじめ、高校卒業までは農業に無関心でした。ある時、家で購読していた農業新聞に、農業高齢化による農家の減少、耕作放棄地が増えて環境問題にもなっていると書かれていた記事に衝撃を受け、農業に対しての関心を高めました。

現在、私は農業大学校で「高糖度トマト」の栽培やグローバルGAPについて学んでいます。実家では「サツマイモ」中心の栽培を行い、出荷は主にインターネットを活用した注文販売です。自分としては、消費者からのニーズの高い「トマト」を、今後、実家の経営部門に加えて経営基盤の強化につなげていきたいと考えています。

「トマト」は、健康食材としても注目され、多くの農家や、企業も取り組んできていると聞いています。多くの方が「トマト」を栽培しているため、販売する単価の上昇には限界がみえ始めています。そんな中で、「高糖度トマト」は、他県でも取り組む事例がみられているものの作り方が難しいうえ、経営が安定していないため、「ミニトマト」「大玉トマト」に切り替えているそうです。私は、目指すのであれば、あえて「高糖度トマト」での栽培に挑戦してみようと考えてます。

スーパーマーケットでは外国産の安い食材をよく見かけます。私は、外国産に負けない食材の提供が必要だと考えます。品質だけでなく、また、安心安全な食材であることが必要だと思います。報道などでは、大腸菌であるO―一五七などによる食中毒の発生が取りざたされることもあり、安全安心が特に重要となってきています。海外では、世界認証であるグローバルGAP（環境保全、労働安全、食品安全）の取得が進んできており、食に関する安全性が保障されてきています。現在、農業大学校は、グローバルGAPの認証の取得に向けての学習を行っています。異物混入をさせないための作業環境、ほ場の安全性の確保に向けた取り組みを行っており、こうした取り組みも参考に、今後、実家でもグローバルGAPの認証を取得し、海外からの食品に劣らない安全安心な食品を提供したいと思っています。

私は就農後、「高糖度トマト」を生産し、消費者から求められる生産者になりたいと思っています。最初から思うようにはいかないと思いますが、グローバルGAP認証の取得への実践、技術力、収益が伴ってきたら、除々に規模拡大を図り、そして法人化を目指

高糖度トマトの脇芽除去作業

したいと思っています。地域雇用という取り組みも考えています。

苦労することは多いとは思いますが、経験を積み、努力していきたいと考えています。

農業大学校で学びたいこと

高知県立農業大学校
園芸学科一年　野菜専攻
谷　真梨萌

私は農業大学校卒業後、すぐに就農するのではなく、量販店などの流通関連の仕事に就きたいと考えています。なぜなら、すぐに家で就農した場合、人とのつながりを広げるチャンスが少なくなるように感じるからです。また、一度外に出たほうが、より実践的に農業を学べ、自らの経験を積め、今後、農業をやっていくうえで新しい発想なども生まれやすくなるのではないかと考えているからです。私の父は、「今の農業は人と同じことをしても自分のブランドはうまれてこない」と言います。仮に新しい発想が生まれても、それを実行することは簡単なことではありません。

私は就農するまでの目標を三点考えています。

一つ目は、消費者からの信頼です。消費者からの信頼を得るための生産から販売までのリスク管理、グローバルGAPの認証を習得することです。現在、農業大学校で高糖度トマトを生産し、生産から、販売まで行いながら、グローバルGAPについて学んでいます。

一連の作業をきちんと行うとともに、ほ場の衛生管理（摘葉した葉を放置しない。ほ場内で腐敗させない。ハサミなどを放置しない）、農薬の取扱い（記帳義務）、記録（温度、灌水量）、異物混入を防ぐ（髪の毛）などを当たり前のようにできる習慣を身につけることです。グローバルGAPを学習することで、今後就農した時に、どういったことに気を使い、注意をはらっていかなくてはならないか、また今後、消費者への信頼をいかに得るかを考えるために、更に真剣に取り組みたいと思っています。

二つ目は、データ管理です。農業は、「勘だ」、という人もいますが、必要な「データ」を取ることで目で見える管理作業が可能となります。生産を安定させることにつながります。このような取り組みにも積極的に取り組んでいきたいです。

私は現在農業大学校で、「高糖度トマト」を栽培しています。栽培しているトマトの草丈、葉の展開速度、開花位置などの生育の変化を毎週記録しています。また、温度、灌水量、追肥量など、ほ場内の管理についても記録しデータ化しています。それらを総合的に分析することで、どういった環境変化で生育しているのかを確認し、対応できる能力を身につけていきたいです。ハウス内環境と生育への影響についてデータを分析する手法を学習することで、私の家の「ミョウガ」栽培に活かし、安定生産に繋げられると思うので、積極的に取り組んでいます。

三つ目は、加工部門についての学習です。私の家では「ミョウガ」の加工品らしくない〝つけもの〟を作っています。作った食材を捨てることはもったいないので、加工の技術を今後、研究し、生産と加工販売を取り入れた農業を追求したいです。

加工という部門については、これからですが、「ミョウガ」に関する加工部門の可能性についてマーケティングし商品を開発・販売していきたいです。

農産物を生産し販売する、安定した単価を確保していくためには生産量を安定させなくてはなりません。そのためには、地域で同じ栽培をしている者同士が協力しあい、技術をたかめていく必要があります。私は、農業大学校で学んだ知識をいかし、「ミョウガ」の安定生産に取り組めるよう技術を高めていきたいと思っています。また、グローバルGAPへの取り組みを推奨し、地域の模範として引っ張っていけたら、産地としても注目され、地域全体での販売促進にもつなげられると思うので、頑張っていきたいと思います。そして、大学校等での学習を通し、夢のある農業を目指します。これから農業をやっていく中で苦難や立ち止まってしまうことは多々あると思いますが、人脈を通し解決に結び付けていきたいです。将来の農業とは、データ管理、グローバルGAPによる信頼、加工部門の取り組みなどが求められると思います。父のように私も規模拡大を図りながら法人化を目指し、技術もあり信頼もあり、生産量も維持できる農業を目指していきたいです。農業大学校での二年間は短く感じますが、多くの事を学び卒業したいです。

高糖度トマトの誘引作業